

国 語

2025年度 一般選抜試験(中期)

医療衛生学部

【注 意 事 項】

1. 国語の問題は43ページから68ページまであります。
2. 解答用紙(マークシート)の氏名・受験番号欄に記入・マークすること。
3. 選択科目欄に選択する科目を記入・マークすること。
4. 解答は解答用紙(マークシート)の解答欄にマークすること。
5. マークする際は濃くはっきりとマークすること。その際、ボールペン・サインペン・万年筆等を使用しないこと。その他マークの仕方に関しては、解答用紙(マークシート)の注意事項をよく読むこと。

I 次の文章を読んで、後の問1～問11に答えなさい。

生身の身体を持たないAIが、この先どんなにコンピュータ技術が発達してもできないことがある。情動がなく感情を持たないために、何かを積極的に追い求める指向性がなく、⁽¹⁾他者の心を想像したり、他者への思いやりを持つたりすることができないのである。つまり、AIは「心」を持たないということだ。人間であれば、相手を思いやり社会性の高い判断・行動をする、ということが出来る。これが社会全体を発展させる大きな力となってきたのであり、人間の圧倒的な優位性と言ってもいいであろう。

何かを決めようとした時に最も優先されるのが、情動を動かした情報である。大昔は、それこそが生存のために重要なことであり、情動を動かす情報にAに対応したものが生き残った。恐怖や怒りの原因となったことにはいち早く決断をして行動に移さなければならぬので、扁桃体からの指令は最優先事項となるわけだ。多くの場合、猛獣の存在や食料不足、天変地異などが恐怖や怒りの原因となった。

もちろん例外はあるが、今の時代に我々の最大の脅威となるのは、猛獣でも天変地異でもなく、同じ社会に住む人間である。社会生活を送り、皆で守りを固めて食料を備蓄しておけば、人間にとつての脅威は外敵ではなく、仲間の裏切りや食料の収奪ということになる。同じ社会の仲間から「変な奴」と思われたら、その社会から追い出されてしまうだろう。それは当然、生きていけなくなることを意味している。

社会で生きていくためには、その決定に他者への配慮はあるのか、という点を自問自答している必要があるわけだ。

高度な社会性を獲得した人間の脳は、単純な自分の欲求を満たすことよりも、直接ではなくても⁽²⁾巡り巡って自分の収穫を高めるであろう行動をシミュレーションして選択することが可能になった。

⁽²⁾他者が何を感じ、何を考えているか推測して社会的な行動を取る、というシミュレーションにおいて重要な働きをするのが、「想像力」である。そして、この想像力、つまり「心の理論」の基盤となっているのが^(注1)分散系であることが、多くの研究で示されている。他者の気持ちを類推する時に、分散系の主たる構成領域である帯状回後部や前頭前野内側部が活性化していたのである。

そしてさらに、食べ物の獲得や他人からの賞賛など直接自分の欲求を満たす報酬の場合と、想像力を働かせて自分の欲求とは直接関係のない「社会性のある利他的行動」をした時に得られる報酬とでは、活性化される脳の部位が違うことが示されている。

バーミンガム大学の^(注2)ロックウッドらは、肉体的な負荷を伴う仕事を選択する時に自己の利益を優先するか、他者に配慮した判断をするかという選択肢において、脳のどの部位が活性化するかについて^(注3)fMRIを用いて調べた。^a、自己の利益を優先した場合には腹側被蓋野と呼ばれる脳幹の中脳背側部が活性化していた。この部分は系統発生学的に古い部分であり、本能的な欲求を優先する場合に活性化して、ド

ーパミン神経などを使って行動を起こさせる。

〔b〕、利他的な行動選択をする時には、前帯状回という前頭前野と深い関係を持つ領域が活性化していた。帯状回は分散系の主な構成要素であり、利他的な行動は前帯状回が広い範囲の脳に働きかけることによって可能になることが示されたのである。

他者の心を推測するためには、その場の状況や他者の表情・行動・声などを分析して、自分の過去の膨大な意味記憶にアクセスしてそれを照合して必要があるからだ。分散系の活性化が想像力を生み出し、利他的な行動へとつながっていく。

こういった利他的で社会性の高い行動は、その人の身体的・精神的健康を高め、社会的な安定と経済的な成功をもたらすことも示されている。会話には毛づくろいと同様に個体間の信頼関係を深め、精神的安定をもたらす効果が見られるが、想像力を働かせることで、各個人の精神的な健康度はさらに高まるのである。

身体を持たないAIには、他者の心を〔c〕くみ取る想像力がないため、他者への思いやりや共感するということもできないであろう。AIには心がないのである。人間がリードしていかない限り、AIどうしで高度なコミュニケーションを取り、協力して新たなアイデアを作るということも難しいだろう。〔X〕と思われるが、人類全体の進化の歴史から見た時、未来に向かって共同体としての社会全体を発展させていく力は、結局人間にしかないとみるのが妥当ではないだろうか。

職業というものは全て「人対人」つまり「人の思いを実現すること」に向けられていると考えれば、AIが完全にとって代わる職業というものは極めてまれで、AIを活用しやすい職業と活用しにくい職業がある、ということであろう。

むしろ私が注目するのは「〔3〕どういった考え方の人がAIによって淘汰されやすいか」という点だ。

AIは知識・データの活用、そしてそこから導き出される論理的思考において、人間が全くなかない仕事をする。つまり、知識の活用、論理的思考だけを武器とする人材の前にAIが立ちはだかるということになる。これまでの日本における高学歴人材、受験エリートと言われる人たちは知識と論理に強い人材であるのだが、それこそがAIの最も得意とするところである。これまでエリートと言われてきた人たちも、それだけに〔B〕していたらAIに淘汰されることになってしまう可能性がある。

それではどのような人材がAI時代において真に必要なとされる人材になり得るのだろうか。

話は少しさかのぼるが、2016年にグーグルの開発した「アルファ碁」というコンピュータ・プログラムが、国際大会で18回優勝を誇る当時最強と言われた棋士であるイ・セドル九段と対局し、4勝1敗で勝ってしまった。ゲームとはいえ、最も古い歴史を持つボードゲームで無限に近い打ち手がある碁の世界で、人類の叡智（えいち）と言ってもいい棋士を破ったのである。この「事件」は大きく報道され、〔4〕人々に衝撃を与えた。

このアルファ碁は、膨大な数の人間どうしのオンライン対局をデータとして入力して、AIが自律的に学習するようにアルゴリズムを開発し

たものである。このプログラム開発の優れたところは、いくつかの別バージョンとの対戦が何度も試みられて、プログラムのブラッシュアップが行われた点であろう。

私がこの対局で注目するのは、アルファ碁の「1敗」の部分だ。膨大なデータとそこから導き出される完璧なプログラム、さらにそこに磨きをかけるために繰り返し返された自己学習といった論理的に最強と言ってもいい戦略でも、人間に勝てない部分があるということだ。

3連敗したイ・セドルは、4局目の78手目で前例のない、非常に独創的な一手を打ってこの対局で勝利した。アルファ碁による過去の学習成果からすれば、あり得ない一手、確率がほぼゼロの一手だったのである。セドルは過去の全ての経験値が作った記憶ネットワークの中に、それまで3連敗した対局のデータを落とし込み、脳全体を結びつけることによって過去にはない一手を「創造」したのである。だからこそAIを出し抜くことができたのだ。

もともと囲碁は非常に複雑で、直観的な判断を要求されることの多いゲームであり、その世界チャンピオンは直観に強い思考回路を持っていたはずだ。一方で、AIは Y、今まで経験したことのない一手に対する適切な対応は取れなかったということだ。

ここにこそ、AI時代を生きていく現代人の思考法に向けたヒントがある。

過去に前例のない事態を迎えた時には、その出来事の「意味」を考えて、過去の意味記憶ネットワークに落とし込んで新たな解釈を加えていく直観的思考が重要になってくるだろう。そして、さらにそれを 柔軟に変えていける人がAI時代にはますます求められてくるはずだ。囲碁がいかに複雑なゲームだとは言え、きっちりとしたルールの中で、相手はただ一人と対戦するわけである。多要素からなる実社会で不特定多数の人間を相手に展開する活動においては、それとは比較にならないくらい複雑性があり、過去の学習データを超えた創造性こそが勝ち抜く条件となってくる。そして、その創造性から得た新たな経験さえも、どんどんネットワークに加えて変えていける力が求められる。

(5) それを生み出す方法が、脳を広く使った直観的思考なのである。

(岩立康男『直観脳 脳科学がつきとめた「ひらめき」「判断力」の強化法』朝日新聞出版)

(注1) 分散系——脳内ネットワークの一つ。何かに集中しているときには抑制されているが、大脳の広い範囲を均等に活性化するときには働くとされている。

(注2) ロックウッド——イギリスの認知・社会神経科学者。

(注3) fMRI——機能的MRI。MRIの技術をもとに、脳の活動を調べる技術。

*問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の言葉の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解

答番号は 1 3。

(ア) 巡り巡って 1

- ① ときに変化をしつとも結果的に
- ② いろいろな条件が重なり加速度的に
- ③ 偶然が重なったあけく奇跡的に
- ④ 多くのところをまわって最終的に
- ⑤ 長い時間をかけた上で持続的に

(イ) くみ取る 2

- ① 斟酌しんしやくする
- ② 重大視する
- ③ 看破する
- ④ 過大評価する
- ⑤ 具体化する

(ウ) 柔軟に 3

- ① 時宜を得て
- ② 可及的速やかに
- ③ まんべんなく
- ④ いたずらに
- ⑤ 融通をきかせて

問 2 空欄 A・Bを補うのに最も適当な言葉を、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は 4・5。

B	A
5	4
① 安住	① 穏便
② 居住	② 真摯
③ 永住	③ 繊細
④ 常住	④ 円滑
⑤ 定住	⑤ 迅速

問 3 空欄 a ・ b を補うのに最も適当な言葉を、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。 解答番号は 6 ・ 7。

b	a
7	6
① ひいては	① その結果
② 一方	② しかし
③ 同時に	③ すなわち
④ あるいは	④ 総じて
⑤ 要するに	⑤ ついには

問 4 傍線部(1) 「他者の心を想像したり、他者への思いやりを持つたりすることができない」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 8。

- ① 他者の心を想像したり、他者への思いやりを持つたりするためには、状況に応じて他者の表情や行動、声などを分析し、論理的に脳を働かせる必要があるが、AIはそのような脳の働きを持つてはいないから。
- ② 他者の心を想像したり、他者への思いやりを持つたりするためには、自分よりも他者を優先する利他性がなくてはならないが、現在のAIにはまだ、利他性の基盤となる分散系の働きを持たせることができないから。
- ③ 他者の心を想像したり、他者への思いやりを持つたりするためには、高度な精神性である「心」を持つ必要があるが、現段階のAIは人間のような精神性を持つまでにはブラッシュアップされていないから。
- ④ 他者の心を想像したり、他者への思いやりを持つたりするためには、相手の気持ちを類推する力が必要だが、そのような力を生み出すための基盤である分散系といわれる脳の働きを、AIは有していないから。
- ⑤ 他者の心を想像したり、他者への思いやりを持つたりするためには、自己の経験にもとづき、状況に応じて直観を働かせなければならないが、現段階のAIにはそのようなことを可能にする経験の蓄積がないから。

問 5 傍線部(2) 「他者が何を感じ、何を考えているか推測して社会的な行動を取る」とあるが、なぜそのようなことをしなければならないのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 9。

- ① 社会の一員として平穩に生きていくためには、常に自分の利益よりも他者の利益を優先する必要があるから。
- ② 肉体的な負荷のかかる行動をとる時に、人間はまず、それによって得られる利益を最大化することを考えるから。
- ③ 人間はAIとは異なり、自分にとって最適な行動を、学習にもとづいて論理的に導き出すことができるから。
- ④ 同じ社会の成員である他者から疎まれるようなことになれば、その社会で生きていくことができなくなるから。
- ⑤ 自分の欲求に反する行動を選択した方が、自分の利益にかなうことがあるのを人間は直観的に理解しているから。

問 6 空欄

X

を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 10。

- ① AIには、AIなりの共同体や社会というものがあるのだろう
- ② 仕事の効率化、便利さという点でAIの貢献度は非常に大きくなる
- ③ AIの自己学習次第では、分散系を持つこともないことはない
- ④ このままでは、いつか人間の職業はAIに取って代わられる
- ⑤ アルゴリズムが改良されれば、AIも「心」を持つようになる

問 7 傍線部(3)

「どういった考え方がAIによって淘汰されやすいか」とあるが、この点について筆者はどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 11。

- ① AIは、論理的思考にもとづきながら人間が考えもしない独創的な答えを導き出すことができる。したがって、論理的な思考には秀でているものの、独創性のない受験エリートといわれる人は、AIによって淘汰されやすいと考えている。
- ② AIは、そのプログラムを他のプログラムと競わせることでブラッシュアップしていく。したがって、既存の知識や思考方法にこだわり、他者と切磋琢磨することを避ける人は、AIによって淘汰されやすいと考えている。
- ③ AIは、自分の欲求を満たす報酬を得るための最適な方法を計算するという点では、現段階で人間よりも優れた成果を残している。したがって、自分の利益に固執する守銭奴のような人は、AIによって淘汰されやすいと考えている。
- ④ AIは、過去の学習データにもとづいて論理的に思考し、解答を導き出すという点において、人間をはるかに凌駕している。したがって、

知識と論理に強いだけのエリート型の人は、AIによって淘汰されやすいと考えている。

- ⑤ AIは、自律的な学習を通して論理的に最適解を導き出すことを、人間よりも得意としている。したがって、自分自身で思考することが苦手、他者に依存することが多い人は、AIによって淘汰されやすいと考えている。

問 8 傍線部(4)「人々に衝撃を与えた」とあるが、何が衝撃を与えたのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 12。

- ① コンピュータ・プログラムが人間と対戦する時代になったこと。
② 人間に勝った「アルファ碁」が自律的な学習をしていたこと。
③ 碁の世界で起きた出来事を報道機関が大々的に伝えたこと。
④ 最強と言われる棋士でもAIには全く歯が立たなかったこと。
⑤ AIが人間の叡智と言われる存在の人間に碁で勝ったこと。

問 9 空欄 Y を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 13。

- ① 囲碁という既存のルールにもとづくゲームでは、最良の一手を創造できるものの
② ブラッシュアップされても、人間の思考回路を上まわるようなことは最後までないから
③ 過去の膨大なデータから、最も勝つ確率を高める次の一手を計算することはできても
④ これまでに創造した手にもとづいて、次の最適な一手を類推することはできるが
⑤ プログラムされたアルゴリズムから、新たに一手を導き出すようなことはしないので

問 10 傍線部(5)「それを生み出す方法が、脳を広く使った直観的思考なのである」とあるが、本文にある直観的思考に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 14。

- ① 複雑な現実の社会において、前例のない事象に直面した時、その「意味」を考えて理解する上で必要とされる思考である。

- ② 人間が社会の一員として生きていくために不可欠な思考であり、外部から得た情報の真偽を判断するために用いられる。
- ③ 過去の学習データに相当するものがない事態に対峙した時に求められる思考であり、人間に特有の「心の理論」の基盤をなす。
- ④ 脳幹の中脳背側部と、前頭前野と深い関係を持つ領域とが、同時に活性化することによってはじめて可能になる思考である。
- ⑤ 新たに得た経験を既存のネットワークに組み込むことによって、その意味や価値を吟味する時に必要とされる思考である。

問11 次に示すのは四人の生徒が本文を読んだ後に、その内容について話している場面である。空欄 甲 乙 丙 に入るものの組み合わせとして最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

生徒A——最近いろいろとA Iが話題になるけど、本文でもA Iに関する問題が取り上げられていたね。

生徒B——正直なところ、A Iについてはまだまだ知らないところが多いって感じかな。何となく怖いような気もする。

生徒C——筆者はA Iと人間とを区別する上で重要なものとして、甲と乙の存在を挙げているよね。A Iにはそれがないけど、人間にはある。これが本文を理解する上でも、重要なポイントになると思う。

生徒D——そうだね。その二つがあるからこそ、人間は人間であってA Iではないと言っても過言ではないと思うよ。

生徒A——特に甲に関しては、筆者は人間の利他的な行動の基礎にあるものとして位置付けているよね。

生徒B——ということは、A Iは利他的な行動をとるようなことはないってことだね。これから人間とA Iはうまく付き合っていけるのかな。心配だよ。

生徒D——たしかに、いろいろと心配になることはあると思う。でも筆者は、A Iが人間から仕事を奪うようなことにはならないと考えているようだよ。

生徒A——A Iは限られた一定の環境の中では力を発揮できても、この社会は丙なんだよ。そんな社会では、やっぱり人間の思考力が要求されることになる。

生徒B——なるほどね。A Iについて少しわかったような気がするよ。ありがとう！

① 甲Ⅱ想像力

乙Ⅱ直観

丙Ⅱ複雑過ぎる

②

甲〓心

乙〓知識

丙〓ルールがない

③

甲〓身体

乙〓心

丙〓危険が多い

④

甲〓知識

乙〓創造性

丙〓発展し続けている

⑤

甲〓思考

乙〓想像力

丙〓あまりに広い

II 次の文章を読んで、後の問1～問7に答えなさい。

「社会(society)」とはもともと「ある特別な目的を持つ人々」による私的集団のことであった。実は今でもそうである。私たちの住んでいる現代社会もまた、「ある特別な目的を持つ人々」による社会である。ある特別な目的というのは金銭である。すべての人は賃労働者として社会に参加している。金銭を目的として働いている。その金銭のために働く賃労働者たちによる空間が社会である。現代社会は金銭のみを目的とする人びとによる特殊な社会(societas)なのである。その社会の成員はいつでも金銭(経済)という「たった一つの意見と一つの利害しかもたないような、単一の巨大家族の成員であるかのように振舞うよう要求」(注1)アレント『人間の条件』される。現代社会はそのような特別な目的をもつ人びとによる社会である。それではその社会はどのように管理されているのか。どのように統治されているのか。官僚制的に統治されている。「統治の最も社会的な形式は官僚制である」(同書)とアレントは言う。

社会という空間においてはすべての人は賃労働者である。ここには「何らかのかたちで賃労働に従事しないような消費者や市民など、不労所得者(利子生活者) 以外には存在しない」(注2) 柄谷行人『世界史の構造』。(1) 労働と仕事の区別が失われた空間である。「労働と仕事の区別が、全体を労働とする方向で取り除かれている」(アレント『人間の条件』)のである。「物化」に関わる仕事もこの社会においては労働である。すべての人が「生きるために」働いている。金銭のために働いている。それが社会である。だから労働者たちに対してはその労働時間に応じて適切に金銭が分配されなくてはならない。分配の原理は平等である。金銭の平等こそが官僚制を登場させるというのである。

社会はどんな環境のもとでも均質化する。だから、現代世界で平等が勝利したというのは、社会が公的領域を征服し、その結果、区別と差異が個人の私的問題になったという事実を政治的、法的に承認したということにすぎない。(同書)

どういう意味か。市場社会、産業化社会が私たちの住む社会である。その社会においてはあらゆる物は交換価値としてある。金銭に交換できる物としてある。社会という空間は均質で平板な空間である。単に商品が流通するための空間でしかないからである。商品が素早く消費される空間である。その平板で均質な空間の中では、商品はすべて周辺と切り離されたパッケージとしての商品である。その場所との関係を持たない商品である。同じパッケージは同じ価格でなくてはならない。同じパッケージ・デザインのその内容は常に均一である。決してばらつきがあつてはならない。グリコのポッキーはすべてが同じサイズ、同じ色、同じ重さ、同じ味である。パックされたキュウリはすべてが同じサイズ、同じ色、同じ重さ、同じ味でなくてはならない。市場社会の中で私たちが消費するあらゆる商品はそれがどのような商品であったとしてもパッケ

ージ化された均一な商品である。パッケージは誰に対しても平等に同じ中身を **A** する。

商品のパッケージは あらかじ 予め消費する人をほとんどピンポイントで想定してパッケージ化されているのである。パッケージ化は消費者の側からは「苦痛なき消費、努力なき消費」(同書)である。「人類が消費したいと思うすべての物を日々自由に再生産する」(同書)。そしてそれを自由に消費することができるような社会である。パッケージされた商品は「もはや、それを使用し、それに固有の耐久性に敬意を払い、それを保持しようとする余裕をもっていない。私たちは、自分たちの家や家具や自動車を消費し、いわば むさぼ 貪り食ってしまったわけなのである」(同書)。使用対象物がまるで生鮮食料品のようになってしまうたのである。パッケージは常にほんの少し更新される。商品はできるだけ素早く消費されなくてはならないからである。更新されたパッケージが古いパッケージを駆逐する。そのほんの少しの「区別と差異」に対する嗜好 しこう が唯一残された個人の私的问题になった。アレントはそう言う。(2) 建築空間もまたパッケージ化される。そのパッケージ化された建築空間を私たちは「施設」と呼んでいる。社会においては建築空間のすべてが施設化される。その施設化された建築空間は官僚制的に管理されているのである。

(3) 一方の「世界」はそれ自体が特質を持った空間である。そこに住む人々がその特質を持った空間を共有している。共有しているという感覚 (common sense) を持っているのである。そしてその世界は周辺との強い関係によって成り立っている。世界は一定の領域を持っている。でもそれは **B** された空間では決していない。世界という空間は、空間それ自体が他者を招き入れる空間なのである。そのように設計されているのである。そして、その空間は自分たちの責任でその特質を維持管理できる大きさの範囲を超えない。ポリスがそうであったように、その政治体を維持できる範囲、それを触知できる範囲を超えてそれ以上に大きな空間にはならないという意味である。「世界という空間」はそこに住む人たちの記憶を未来に向けて伝達する空間である。自分がそこに存在したという痕跡を残す空間である。

その世界は産業革命による労働生産性の驚異的な増大によって、その特質が失われていった。仕事と労働の区別がなくなって、すべての人が賃労働による労働者とみなされるようになったからである。生きるために働く労働者である。労働者は消費される商品をつくり、そして一方でただそれを消費する消費者である。そして自分自身が市場社会の商品である。「経済的に組織された社会」(金錢を唯一の価値とする社会) という空間の住人である。そして、金錢的な価値(利潤)を拡大するためには社会はどこまでも広がりなくてはならない。

「資本家は地球上の他の部分に前資本主義的な土地を探し求め、それをしも資本蓄積過程に引き込むことを余儀なくされるのであり、いわばそれはその外部にあるものいっさいを餌食とすることになる」と(注3) ローザ・ルクセンブルクを参照してアレントは言う『暗い時代の人々』。

社会という空間は境界を持たない。どこまでも広がり続けようとする空間である。均質なそして平坦 へいたん なこの空間こそが社会である。その空間はそこに住む人たちの記憶を未来に向けて伝達する空間ではない。その空間はそこに住む人々に対して負荷を与えない。住む人たちを拘束しない。「鳥のように自由な労働者」の空間である。私たちが現に今住んでいる空間である。

「世界」と「社会」は全く異なる空間である。繰り返すが、世界は社会にいたるそのプロセスの途上にある空間ではない。世界は過去にあつて今は失われた空間ではない。世界は今でも私たちの身近にある。それが私たちには見えないのである。すべての物が消費のための商品になってしまった社会の内側にいる私たちには、⁽⁴⁾ それとは全く違う耐久性のある「物が別個に存在している」こと（アレント『人間の条件』、それによつてできている世界が存在していることが分らない。そうした世界を見る目を失つてしまつていのである）。

「世界」は過去に属する空間、遅れた者が住む空間としてしか認識することができない。「社会」の住人である私たちにとっては、それは克服されるべき空間なのである。世界は後進社会であり、地方社会であり、地域共同体的社会であり、伝統社会である。「前資本主義的」な空間である。「資本蓄積過程」に引き込まれるべき空間なのである。

「社会」（市場社会あるいは消費社会、大衆社会あるいは市民社会さらにあるいは官僚制的社会）は「世界」を解体してその「いっさいを餌食とする」。そのような空間である。そして、二〇世紀の建築家たちは X のではなく、むしろそうした「世界」を解体して「社会」という空間をつくる役割を担つたのである。建築家が目指した建築は、世界に貢献するような建築ではなく、社会の要請（命令）によつて私的に消費されるような建築だった。機能的であれ、という社会の命令に従う建築である。経済的な効果のための建築である。経済的な効果のための私的空間である。周辺環境とは無関係なパッケージの設計者になつていったのである。そして今、建築家はそのようなパッケージ設計者として認知されている。

（山本理顕『権力の空間／空間の権力 個人と国家の〈あいだ〉を設計せよ』講談社）

（注1）アレント——ドイツ出身の政治哲学者、思想家（一九〇六—一九七五）。

（注2）柄谷行人——哲学者、思想家（一九四一—）。

（注3）ローザ・ルクセンブルク——ポーランド出身の政治理論家、哲学者、革命家（一八七二—一九一九）。

*問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問 1 空欄 A・B を補うのに最も適当な言葉を、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は 16・17。

A		B	
16	① 要求	② 還元	③ 保証
17	④ 補填	⑤ 信託	
	① 放棄	② 包括	③ 閉鎖
		④ 管理	⑤ 開発

問 2 傍線部(1)「労働と仕事の区別が失われた空間である」とあるが、労働と仕事はどう異なると考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 18。

- ① 労働は、パッケージ化された商品を生産することを通じて、社会に貢献するために行われるが、それに対して、仕事はあくまでも自分が生きていくために行われ、労働のような利他的な性質を持っていない。
- ② 労働とは賃労働であり、生きるために賃金を得ることを目的として行われるものであるが、それに対して、仕事とは無目的に行われる前資本主義的な人々の働きであり、今では世界から排除されてしまっている。
- ③ 労働とは、経済的に組織された社会において、高い付加価値をもつ商品を生産することであるが、一方、仕事とは必ずしも金銭的な価値に還元されない物を、市民や大衆が日常においてつくり出すことである。
- ④ 労働は消費される商品を生産するために行われ、それを通じて労働者は賃金を獲得するが、それに対して、仕事とは生活の必要を満たすために行われるものであり、形のある物を生み出すようなことはない。
- ⑤ 労働とは、生きるために必要な金銭を獲得することを目的として商品を生産することであるが、一方、仕事とはそのような意味での生産活動ではなく、自分の生活環境に根ざした耐久性のある物をつくることである。

問 3 傍線部(2)「建築空間もまたパッケージ化される」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 19。

- ① 無個性な空間がどこまでも広がる「社会」では、商品は場所との関係を欠いた均一なものとして生産され、消費される。それと同じように建築空間も、周辺環境とは関係のない私的空間としてつくり出され、消費されるようになるということ。
- ② 私たちの住む「社会」は、市場社会、産業化社会であり、そこでは商品は均一であることが求められる。それと同じように建築空間も、個

性的なものであつてはならず、地域性と場所性を優先したものにならざるをえないということ。

③ 特定の目的を持った人々によつて形成される私的集団である「社会」においては、商品は利益追求という目的のために生産される。それと同様に建築空間も、社会的な要請を受けて特定の機能を果たすものとしてつくられるようになるということ。

④ 前資本主義的な「世界」を解体した上で成立した「社会」では、賃労働によつて商品が大量に生産され、市場に流通することになる。それと同じように建築空間も、建築家の手によつて大量につくり出され、社会に広まっていくということ。

⑤ 均質で平坦な空間である「社会」は、官僚制的に管理される均質な空間であり、そこでは「世界」にあつたような場所性は捨象されている。それと同様に建築空間も、一つの完結した空間として徹底した管理のもとに置かれるようになるということ。

問 4 傍線部(3) 「一方の『世界』はそれ自体が特質を持った空間である」とあるが、「世界」に関する筆者の考えとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 20。

① 「社会」の内側にいる人々には、「世界」は過去の遺物のように思われているが、それは「世界」が見えていないだけであり、「世界」は今でも、「社会」とは異なる空間として存在し続けている。

② 現代のパッケージ化された「社会」とは異なり、空間としての個性を有しているのが「世界」であり、そこに住む人々には強い連帯感が生まれるが、その半面、外部の人間を排除しやすいという問題がある。

③ 「世界」とは、一定の領域において成立する地域共同体であり、その後進性は否定できないが、それだからこそ、現代の資本主義的な「社会」とは異なる原理を持った空間として注目する価値がある。

④ かつてのポリスと同様に、共同体として維持できる範囲を超えて拡大することはなく、そこでは経済活動よりも政治活動が重視されるという点において、資本主義的な「社会」とは大きく異なる。

⑤ 「世界」は金銭的な価値に還元できない耐久性のある物から構成されており、そこに住む人々は空間を共有しているという意識が非常に高く、そのあり方は単一の巨大家族にたとえられるほどである。

問 5 傍線部(4) 「それ」の指示内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 21。

① プロセスの途上

- ② 失われた空間
- ③ 見えない物
- ④ 消費のための商品
- ⑤ 社会の内側

問 6 空欄 X を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 22。

- ① 機能の追求によって「世界」のための空間をつくる
- ② パッケージ化された物によって「世界」の空間をつくる
- ③ 均質な物によって官僚制的な「世界」の空間をつくる
- ④ 耐久性のある物によって「世界」のための空間をつくる
- ⑤ 労働によって自分たちが住む「世界」の空間をつくる

問 7 次のア～オについて、本文の内容と合致するものは①、合致しないものは②を選び、それぞれ記号で答えなさい。 解答番号は 23。

ア 人々はもともと「世界」に住み、そこで商品をつくる仕事をしながら生活を営んでいた。しかし、産業革命の後に「世界」が「社会」へ一新されると、人々は自らの労働力をも商品として売り、賃金を得なければならなくなった。 23

イ 「世界」に代わって「社会」が形成されるようになると、人々は官僚制的なしがらみから解放された。そして、労働者は誰もが平等に生産活動にかかわることができるようになり、「鳥のように自由な労働者」となった。 24

ウ かつて二〇世紀の建築家に求められたのは、経済的な効果を上げるための機能的な建築をつくることであつた。そのようにして、建築家は「社会」におけるパッケージの設計者とみなされるようになり、それは今でも変わらない。 25

エ 現代では、商品はあらかじめ消費する人を想定した上で、パッケージ化された均一なものとして生産される。同様に、建築空間もパッケージ化されたものとなり、独自の特性をもたない「施設」として管理されることになる。 26

オ 「世界」においては、空間を共有しているという意識が生まれ、そこで生きた人々の痕跡が刻まれる。しかし「社会」においては、そのよ

うな意味での人々とのつながりは生まれず、無際限な空間が広がることになる。

Ⅲ 次の文章を読んで、後の問1～問11に答えなさい。

ふだんの私たちは、たくさんのことについて「知っている」と言っています。Aいま目の前にあるのがイスだとかコンピュータだとかいうのを「知っている」し、自分の部屋のこと「知っている」でしょう。私たちはイスを公園と呼びませんし、コンピュータをフライパンとは呼びませんし、自分の部屋をリングとは呼びません。そのように呼ぶのはまちがいです。そんなまちがいはありません。イスは絶対にイスですし、コンピュータは絶対にコンピュータですし、自分の部屋は絶対に自分の部屋です。まちがいに絶対だと思っ

てこそが、「知っている」ことです。

このように「1知っている」ことを、自分自身しか知らないということはありません。たいていほかの誰かも、同じように「知っている」と言ってくれます。私たちがイスだと思っているものを、別の誰かが電子レンジだと言い張ることはありません。誰もがイスをイスと呼びます。B「知っている」はずのことを「知らない」と言うひとがいれば、そのひとは何かおかしいのではないかと感じてしまうかもしれません。たとえば身の周りに、イスをイスだと「知らない」と言うひとがいたら、どう思うでしょうか。そうやって「知らない」と言うひとがいれば、「そんなの知っていてあたりまえだよ」とか「それは常識だよ」とか思ったり言い返したりしてしまうのではないのでしょうか。

世のなかでは、誰もがごく自然に思っていること、つまり誰もがふだん「知っている」と言っていることを、あたりまえのこと、ふつうのこと、常識だと呼んでいます。イスがイスなのはあたりまえのことです。イスを指してイスと呼ぶのはふつうのことです。イスを「知っている」のは常識なのです。

こうして私たちが当然「知っている」ことのなかで、自分自身がつとも「知っている」ものはなんでしょうか。ほかの誰よりも自分自身が「知っている」もの、それは私たち自身ではないでしょうか。私たちは、この世に生まれたときから、私たち自身、自分自身とア四六時中一緒にいます。これまでずっと離れることがなかったし、そしてこれからもずっとそうでしょう。私たちは誰よりも自分自身と一緒にいるので、秘密にしていることなど、ほかのひとが知らない自分自身のことともよく「知っている」のです。ですから私たちは、自分自身のことを何よりも、誰よりもいちばんよく「知っている」はずです。「自分のことは自分がいちばんわかっている」と言われるように、私たちが自分自身を「知っている」のは当然であり、それがまさにあたりまえのこと、ふつうのこと、常識なのです。

私たちは、「知っている」ことに疑問を持ちませんし、自分自身のことはもちろんのこと、目の前にあるもの、身の周りにある世界のこととも「知っている」と言います。けれども世のなかには、私たちが当然「知っている」ことを、やはり「知らない」と言うひとがいます。たとえば、イスやコンピュータのことを知らないひといるかもしれません（赤ちゃんがイスを知らない、というような、人間の認知能力

の問題は、ここでは除外しておきます。実際のところ、コンピューターが普及していない地域はありますから、その地域のひとがコンピューターを知らないことはありえるでしょう。またコンピューターが発明されるはるか以前の時代ならば、誰もコンピューターを知っているはずがありません。

C、ひとや時代や地域が変わると、当然「知っている」と思われることを、知らないことがあります。では、私たちが「知っている」と言えるのは、あたりまえのことでもふつうのことでもなく、常識でもないことになるのでしょうか。

先ほど述べた、自分自身を「知っている」場合はどうでしょうか。自分自身が誰だかわからない、自分自身のことを知らないというひとはいるでしょうか。私たちとはちがって、**X**が、どこかの地域にいますでしょうか。私たちはちがって、大昔のひとは自分自身のことを知らずに生きていたのでしょうか。いずれもそんなことはありません。いつの時代にも、どんな地域でも関係なく、誰であっても、私たちと同じように、自分自身のことを「知っている」と言っています。ということは少なくとも、私たちが自分自身のことを知らない、ということはありません。私たちは誰もが自分自身のことを「知っている」し、私たちの「知っている」自分自身は、絶対に自分自身なのです。

するとやはり、「私たちが「知っている」と言えるのは、あたりまえのことでも、ふつうのことでも、常識でもないのだ」と言うことはできないのです。

たしかに、私たちは自分自身のことを誰よりもいちばん「知っている」と言えますし、知らないことはありません。けれども、次のような経験をしたことはないでしょうか。

周りの家族や友人から、「暇なとき、いつも髪の毛を触っているね」とか、「ごまかそうとすると鼻をかくよね」とか言われて、ハッとしたことはないでしょうか。ちよつとした態度や表情、しぐさなど、自分自身のクセを誰かに指摘されて、驚いたり恥ずかしい思いをしたりした、というような経験です。このとき私たちは、いちばん「知っている」はずの自分自身に、知らない面のあることを気づかされます。【①】しかもそれは、私たち自らがわかるのではなく、ほかの誰かから指摘されるのです。ですから⁽²⁾私たちは驚いてしまうのです。

このような経験をすると、私たちが自分自身のことをいちばん「知っている」とは、本当は言えないのだというのがわかります。そしてこのことから私たちは、「どんなことでも絶対に知っている」と言えなくなってしまうし、それを「あたりまえのことだ」とも、「ふつうのことだ」とも、「常識だ」とも言えなくなってしまうのです。

ではこのときに、自分が知らなかったのだと、素直に認めるのでしょうか。それとも、知らなかったと思われるように振る舞うのでしょうか。知らなかったクセをほかの誰かから指摘されても、以前から知っていたかのような素振りをしてはいないでしょうか。こういう素振りをしてしまえば、そこには⁽³⁾常識というワナが待ちかまえています。

たとえば「あなたは常識がない」と言われたら、きつと嫌な気分になり、とても恥ずかしい気持ちになるでしょう。「そんなことも知らないのか」とい**な**じられることもあるでしょう。世のなかでは、常識を知らないこと、非常識であることは、ダメなことだと思われています。【②】常識は知っていて当然なのです。ですから私たちは、非常識と思われたいようにして、そしてなんでも「知っている」かのような顔をして、日々過ごしてはいないでしょうか。こうして、知らないなんてありえない、「知っている」のが当然でなければならない、という気持ちにとらわれます。これこそが、常識というワナなのです。

実際私たちは、「知っている」とは言えない経験をいくつもしているはず。【③】それにもかかわらず、私たちは、そうした経験がまるで最初からなかったかのように、なんでも当然「知っている」ように思っています。そして世のなかには「知っている」ことしかないかのよう**に**振る舞い、知っているのが「あたりまえだよ」とか「常識だよ」とか言います。知らないことが出てきても、「本当は知っているのだ」と言い張ります。そこまで強く言い張らないとしても、自分に知らないことがあるのを認めないでしょう。自分自身についても、すべてを知らないことはなくても、ある程度は知っていると考えるでしょう。【④】それなのに私たちは、まるで知らないことがないかのように過ごしているのです。私たちは、常識というワナに陥ると、自分自身の無知をごまかし、なんでも知っているかのような態度を見せようとしてしまうのです。さもないと、非常識だ、無知だと思われてしまうからです。あたりまえのことやふつうのことや常識を知らないなんてありえませんか、あつてはならないのです。

こうして私たちは、すべてを知っているわけではないのに、知っているつもりになるのです。

私たちがふだん「知っている」と思っていることは、実は本当に知っているわけではありません。【⑤】私たちは知らない面のあることに気づかないままの状態です。たとえば自分自身とは、ほかの誰かから指摘されたクセも含めて自分自身なのですが、そのことを私たちは知らずにいます。私たちは、自分自身の全部を知っているわけではないのに、ある程度までわかっているだけで「知っている」と言ってしまうのです。このように、ふだんの私たちが「知っている」と言っていることは、特定の角度しか見ていない、部分的で一面的な知識にすぎないのです。

(4) こういう部分的で一面的な知識のことを、**偏見と呼ぶことができます**。私たちはふだん、常識というワナにとらわれていると、こうした偏見しか持っていないのに「知っている」と言って、知っているつもりになっています。これだと私たちは、本当の意味で知ることができません。それでは、私たちはどうしたら、常識というワナから脱け出して、偏見を持たずに「知っている」と言うことができるのでしょうか。

先ほどの事例で私たちは、自分自身のことを誰よりも「知っている」はずなのに、私たちの知らない自分自身がある、ということに気づかされていました。**D**、その知らない自分自身のこととは、ほかの誰かから指摘されました。このとき私たちは、常識というワナから脱け出すチャンスを得ています。そして私たちは、知っているつもりではなく、本当の意味で知っていると**言**えるふたつのことを知るようになるので

す。

私たちは第一に、自分たちには知らないことがあることを知ります。⁽⁵⁾ これがなければ、私たちはそもそも知りたいと思うこともないでしょう。 知りたいと思うきっかけとなるのが、知らないことを知ることなのです。 そして私たちは第二に、 Y のです。 これがなければ、まるでなんでも知っているかのように錯覚し、自分自身の知識にたいして傲慢になることでしよう。 私たちは、自分自身について知らない面があるのに、自分自身のことを「知っている」のだと、⁽⁶⁾ 何食わぬ顔をして生活している自分自身に気づかされるのです。

さらに私たちは、自分自身の知らないことを、ほかの誰かが知っているのに気づきます。それは考え方や価値観が、自分自身が思っている以外にもあることを意味します。このことから私たちは、自分とは異なるほかの誰かの考え方や価値観のあることに気づけるようにもなりますし、考え方や価値観が多様であることに気づけるようになるのです。

(青柳雅文『疑う、知る、考える 哲学をはじめ』ミネルヴァ書房)

*問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の言葉の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。 解答
番号は

 ～

。

(ア) 四六時中

- ① ときには
- ② ぴったりと
- ③ つねに
- ④ かねがね
- ⑤ いつまでも

(イ) なじられる

- ① 見下される
- ② 問いつめられる
- ③ うとまれる
- ④ 叱咤^{しつた}激励される
- ⑤ ばかにされる

(ウ) 何食わぬ顔

- ① 呆^{あき}れ顔
- ② 澄^あました顔
- ③ したり顔
- ④ 素知らぬ顔
- ⑤ 訳知^{わけ}り顔

問 2 空欄

 ～

 を補うのに最も適当な言葉を、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いては

ならない。解答番号は A・、B・、C・、D・。

- ① たとえば ② なぜならば ③ 逆に ④ このように ⑤ しかも

問 3 傍線部(1)「『知っている』ことを、自分自身しか知らないということはありませぬ」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 自分が常識として「知っている」ことを「知らない」と言うひとがいるとは、誰も思わないから。
② 自分が「知っている」ことは、いわば常識として、時や場所を超えて広く共有されている事柄だから。
③ 自分をもっとも「知っている」と言える自分自身については、ほかのひとと同様に知っているから。
④ 自分が「知っている」と思い込んでいることは、大抵、ほかのひとともそう思い込んでいるから。
⑤ 自分が「知っている」と言えることは、その時代やその地域では、誰もが知っているものだから。

問 4 空欄 を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 自分自身を「知っている」と言えるひと
② 自分自身のことを知らずに生活しているひと
③ 自分自身にまったく無頓着でいられるひと
④ 自分自身が無知であることを恥じないひと
⑤ 自分自身の存在を疑わないでいられるひと

問 5 傍線部(2)「私たちは驚いてしまう」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 私たちはふだん、自分のことは自分がいちばんよく「知っている」と信じて疑わない。しかし、自分に恥ずかしいクセがあることを第三者

から指摘されるようなことがあると、ほかのひとから見た自分という存在が別にあるということに気づかされるから。

② 私たちはふだん、ほかのひとが「知っている」ことは自分も「知っている」と思っている。しかし、誰かから自分では知らなかったクセの存在を指摘されるようなことがあると、自分よりも多くのことを「知っている」ひとがいるということに気づかされるから。

③ 私たちはふだん、自分が自分自身のことをもっともよく「知っている」と考えている。しかし、意外なひとから自分でも知らないちよつとしたクセがあることを指摘されるようなことがあると、必ずしもそうではないということに気づかされるから。

④ 私たちはふだん、自分が「知っている」ことは誰でも知っており、常識だと信じている。しかし、周りのひとから思いもよらないクセが自分にあるのを指摘されるようなことがあると、世のなかにはまだ知らないことがあるということに気づかされるから。

⑤ 私たちはふだん、自分自身のこととは誰よりも自分が「知っている」と思っている生活している。しかし、ほかのひとから自分にちよつとしたクセがあるのを指摘されるようなことがあると、自分に知らなかった一面があるということに気づかされるから。

問 6 傍線部(3)「常識というワナ」とあるが、それはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 38。

① 常識を無条件に肯定しているうちに、「知っている」ということに対して疑問を抱かなくなり、世のなかには自分とは別の考え方や価値観を持った人がいるのを認めなくなってしまうということ。

② 私たちがふだん「知っている」と思っている常識は部分的で一面的な知識にすぎず、本当であるかもわからないにもかかわらず、自分は本当のことを「知っている」という顔をしてしまうということ。

③ 世のなかで常識とされていることを知らないのは恥ずかしいこととされているので、知らないことに直面しても「知っている」かのように振る舞い、自分の無知をごまかそうとするということ。

④ 人間の認知能力には限界があるため、知らないことがあるのが当然なのだが、非常識であるとそしられるのを恐れるあまり、あたかも自分はずべてを知っているかのように思い込もうとするということ。

⑤ ほかのひとが非常識であったときに「あなたには常識がない」と非難しているうちに、その非難が自分に向かうことを恐れるようになり、知らないことがあったときには自縄自縛に陥るということ。

問 7 傍線部(4)「こういう部分的で一面的な知識のことを、偏見と呼ぶことができます」とあるが、ここでの偏見について筆者はどのよ

うに考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 39。

- ① たとえば、私たちがふだん「知っている」と思い込んでいることがらであるが、そのような知識にとらわれていると、自分とは異なる考え方や価値観があることに気づくことができない。
- ② たとえば、誰もが「知っている」と思われているような知識であり、そのような知識にとらわれている限りは、常識から抜け出すことができないが、自分自身を知るためにはそれも仕方がない。
- ③ たとえば、「あなたには常識がない」と一方的に決めてかかる独善的な人間が持つ知識であり、そのような知識にとらわれているうちは、自分自身も同じような批判を受けることになる。
- ④ たとえば、今では「知っている」のが当然だとされるようになった、一つ前の時代の知識であるが、それにとらわれていると、自分が無知であることに気づかず、知的に進歩しなくなってしまう。
- ⑤ たとえば、自分だけは「知っている」という錯覚に陥っている人間が持つ、偏った知識であるが、そのような知識をいったん相対化しない限り、自分の偏狭さに気づくこともできない。

問 8 傍線部(5)「これがなければ、私たちはそもそも知りたと思うこともないでしょう」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 40。

- ① 世のなかにはまだ自分たちの知らないことがあるのを知ることがなければ、私たちはいつまでたっても、無知で傲慢なままにいることになるだろう、ということ。
- ② 世のなかには自分たちの知らないことがまだ存在するということを知ることによってはじめて、私たちは知りたいたいという意欲を持つようになるのだろう、ということ。
- ③ 自分たちが知らないと思っていたことをやがて私たちは知るようになるのだが、それははじめから私たちに知りたいたいという思いがあるからなのだろう、ということ。
- ④ 世のなかのどこかに自分たちがまだ知らないことが存在しているということが、私たちが何かを知りたいと思うことにきつとつながっているのだろう、ということ。
- ⑤ 自分たちには知らないことがあるが、その知らなかったことを知ることによって、さらに私たちは新たな何かを知りたいと思うようになる

のだろう、ということ。

問 9 空欄 Y を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 41。

- ① 自分にも「知りたいと思うようになるきっかけがある」ことを知る
- ② 「自分たちの知らないことが世のなかにはまだまだある」ことを知る
- ③ 自分も「いつなんどき知らないことに直面するかわからない」ことを知る
- ④ 自分たちには「知らないことがあることを知らずにいる」ことを知る
- ⑤ 「自分が知っていることを他人も知っているとは限らない」ことを知る

問 10 次の一文が入るべき箇所を、本文中の【①】～【⑤】のうちから一つ選べ。解答番号は 42。

【しかしクセを指摘されたときのように、知らないこともあります。】

問 11 次のア～オについて、筆者の考えと合致するものは①、合致しないものは②を選び、それぞれ記号で答えなさい。解答番号は 43。

- ア 自分が持っている常識を相対化し、他人から知識を吸収することが、知的に豊かになることとの条件である。
- イ 自分が「知っている」ことは、当然ほかのひとも「知っている」と、ふだん私たちは思いなしている。
- ウ 自分をもっとも「知っている」はずの自分自身でも、何かをきっかけにその自明性が崩れることがある。
- エ 自分が「知っている」ことと他人が「知っている」ことを発展的に統合することで、知識の真実性は高まる。
- オ 自分が無知となることを回避するためには、まず誰もが知っている常識を身につけなければならない。

47 46 45 44 43